

・考えたこと

今回の講義では、東京大学名誉教授の溝口勝先生から、ICTを活用した農業・農村の再生や「復興農学」という新しい学問の考え方について学ぶ機会を得た。私はもともと、東日本大震災をきっかけに被災地の復興や農業の再建に関心を持ってきた。特に農村地域のインフラ整備や環境修復を通して、どうすれば地域がもう一度活気を取り戻せるのかを考えている。そのため、今回の講義資料の中から「農業農村工学のつなぐ・つながるを考える」と「福島から始まる復興農学」の2つを選び、技術と人の関わり、そして復興のあり方について考えた。この資料では、Society5.0の時代に向けて、ICTやIoTを農業農村工学にどう活かすかが論じられている。印象に残ったのは、「つながることの重要性」である。単に機械やセンサーを導入することが目的ではなく、それらをネットワークで結び、人や地域が協力して新しい価値を生み出していくことが大切だと述べられていた。私はこの考えに強く共感した。近年、農業の現場では高齢化や担い手不足が進んでいるが、高齢者でも容易に操作が可能なICTによって作業データやノウハウを共有すれば、経験の差を補い合いながら効率的に農業を進めることができる。特に農村地域では、人と人のつながりが技術導入の鍵になると感じた。一方で、通信インフラが整っていない地域では、ICTの利活用が難しいという課題も指摘されている。私は農業土木を学ぶ者として、「まずは人が使える環境をどう整えるか」という視点が重要だと感じた。技術を導入するだけでなく、それを支える道路・電力・通信などの基盤整備を含めた総合的なインフラの視点が必要だと思う。ICTやIoTの導入は、単に作業を便利にするものではなく、地域の新しい協働の形をつくるチャンスでもある。技術の進歩を「人のつながりを深める手段」として活かすことが、これからの農業農村工学に求められているのではないかな。

もう一つの資料「福島から始まる復興農学」は、原発事故後の福島で進められている新しい農学の取り組みを紹介していた。「復興農学」という言葉には、被災地の再生を単なる元通りにするのではなく、そこから新しい社会をつくり出そうという強い意志を感じた。溝口先生が「人の復興が重要である」と述べていた点が特に印象的だった。農地の除染や生産回復といった技術的な課題の背後には、失われた地域のつながりや人々の生活の再建という、もっと深い問題があるのだと思う。福島での取り組みは、災害だけでなく気候変動や人口減少など、さまざまな課題に直面する日本の他の地域にも通じると感じた。地域の資源を見直し、住民や学生、研究者が一体となって取り組む姿勢は、これからの時代に必要なレジリエンスの姿を示している。

復興農学は「過去に戻る学問」ではなく、「未来をつくる学問」だと思う。被災地の経験や知恵を生かして、より持続的でしなやかな地域を築いていくことが、これからの環境修復や農業の役割になると感じた。

2つの資料を通して、技術だけでなく「人の復興」が地域再生の中心にあることを改めて実感した。ICTやIoT、そして復興農学の考え方は、一見異なるようで、どちらも人

と人とのつながりを取り戻すことを目指している。

私自身も将来、農業土木の立場から被災地の復興や地域づくりに関わり、技術と人を結びつけられるような仕事をしたいと考えている。今回の講義を通して、その思いがより強くなった。

・質問

ICT や IoT の活用によって効率化が進む一方で、人間同士の関わりが減ってしまう可能性もあると思います。先生はこの「人と技術の関係」について、どのようにお考えでしょうか？